

第5回実践事例研究会 「崩壊クラスの再建」(今泉 博著, 学陽書房) をめぐって

話題提供者 清瀬市立清瀬第五小学校教諭 今泉 博

1999.12.18

私は一昨年、6年生を担任した。大変な6年生だった。「荒れ」ている子どもたちを、これまでも何度か担当している。28年間教員をやっているが、こんな状況で1年間やっていけるのかという不安が募るばかりであった。その後、1年生を担任したのだが、こちらでもパニックを起こす子などがいて、大変な子どもたちであった。以前だと、高学年が大変でも1年生2年生ならなんとかなるという感じだった。しかし最近、1年生も以前と大きく変わってきている。

荒れた学級をもって一番きつかったのは、とにかく聞いてもらえないことである。「昨日、何とかってテレビ見た」なんて言ったら恐怖である。子どもたちはそれをきっかけに、話し始める。さっきまで静かにノートをとっていた子も、おしゃべりの輪に入る。おしゃべりが一瞬に広がってしまう。もう、「お話をやめなさい」などと言っても全然通らない。心臓がキューっとしめつけられる思いになる。こういうことが何回か続けば、身体がもたない。すぐになんとかしようとするほうが無理なのだ。子どもは、教師から独立した存在である。教師がひとこと言ったからといって、すぐ従うという方が問題ではないかと考えるようになった。

特に私は、全校朝会が一番いやだった。月曜日の朝、全校朝会がある。チャイムが鳴ると、1年生から5年生まではすうっと並ぶ。ところがうちの6年生の子たちは並ぶまでに時間がかかる。ほぼ所定の位置に来たかと思えば、今度はおしゃべりをはじめ。押し合い蹴り合いまでしている子たちがいる。すると、全校の先生、子どもたちはみんな6年生の方を見る。そこで、私が黙っているわけにいかなくなってしまう。黙っていれば、先生はちっとも指導しないということになるからである。指導を放棄しているということになるため、効果はないと思いつつもそばに行って、「校長先生が話してるからもうそろそろ話やめてもらえない？」などという、「うるせー」という言葉が返ってくる。私はスタスタとまた戻るという状況だった。そこで、私はある時から、子どもを見ないことにした。子どもを見ていると、こっちがイライラしてくるので、屋上によくとまるカラスを見て

いたり、周りの草や木を見ていたりしていた。しかしそれも長く続かないため、いろいろ考えながら、子どもの様子を見ていると、やはり子どもの様子にも変化があるということがわかってきた。今日は校長なかなかいい話するな、と思ったときには、やはり子どもは話をよく聞いている。ところが今日は私から見ても「道徳的」だったり、あまりおもしろくないような話だと、集中できない。私はいつも「6年生なのに」という見方をしていたけれども、しかしそうではなくて、「6年生だから」というふうにと考えると、子どもが見えてくるんだなということ、改めて感じた。6年生になるとやはり、状況の判断が的確だ。どうでもいい話は聞かないが、意味ある話は、よく聞く。そういうところから、子どもを6年生「なのに」と捉えてるうちは見えなかったが、「だから」と捉えると、子どもの内面や、今子どもが何を願っているのかということが少し見えるようになってきた。授業中におしゃべりが広がるということは、友だちが何を考えているのか、自分がどう見られているのか気になるからでもある。おしゃべりに入ることによって、自分も教室のみんなとつながっていたいという願いがあるからではないかと思うようになった。教師から注意されるよりも、友だちから浮いたり、疎外される方がよほどつらいことなんだなと感じた。

6年生を担任して、教室での「いじめ」がものすごくあったことがとても辛かった。Aさんが歩いていくと、「汚ねえ、向こう行け」などと言って、周りの子が罵声を浴びせる。それが大変悲しいことだった。このようなことは許されることではないが、子どもの状況から、すぐに解決できるようなことではなかった。管理的な対応では反発を生むことは明らかだった。丁寧に子どもに接していかなければならないと思った。図工や音楽など、教室移動のときが大変だった。専科の授業がはじまって、「はい、音楽だから並びなさい」などと言ってもなかなか並ばない。ある時、「みんなトランプしたいんだ、友達と話してたいんだ、先生も時間とってあげたいんだけどね、音楽の先生が待ってるからそろそろ並んで頂けませんでしょうか」というと、すうっと子どもが動き出した。そ

こから、「あ、これだな」と思いながら子どもと接してきた。やはり人間として尊重される、そういうことを子どもは願っているんだなというふうに思った。一方的な指示や注意、高圧的な態度では、もう子どもたちは耳をかそうとしない。「いじめ」や「暴力」などを、できるだけ早く解決していきたいと思うが、静かに話し合いなどできる状態ではなかった。そこで「紙上討論」を積み重ねていくことにした。

「紙上討論」のための朝の15分間は、私にとっても心が休まる時間だった。なんらかの子の文章をプリントして渡すと、子どもたちは目を皿のようにして、必死になって読んでいる。紙上には、名前も出ていない。したがって、子どもたちは「これは、誰のことなんだろう？自分のことかなあ」などと考えながら見る。「いじめ」に関わってきた子たちにとっては、自分がしてきたことがまざまざと鏡に映し出される時間でもあった。子どもたちは心から反省して、変わっていった気がしている。

私は、担任したときに、これ以上悪くならなければそれでよしとしよう、こんな状態では今の状況を改善するのは難しいという思いでいた。しかし、実際に「紙上討論」をやってみた結果、2カ月ちょっとぐらい、だいたい6月の上旬には子どもたちは静かに学習することができるようになった。この事実から私は荒れているクラスほど、人間としての願い、たとえばもっとみんなと仲良くしたいとか、こんな「いじめ」が起きないようなクラスであってほしいとか、そうした願いはものすごく大きいのだと実感した。子どもたちの願いに依拠しながら学級をつくっていけば、本当に子どもたちは急速に変わっていくのだと思った。私が子どもと接しているの実感として、おそらくこれからは「対話・討論、共感・納得・合意」といったことが実践のキーワードになっていくにちがいない。

今、研究者の間では、「学びからの逃走」ということがかなり言われてきている。たしかにそういう面があることは事実だ。しかし同時に、豊かな学びを渴望しているというような状況も一方にある。学習においても、拒否と渴望のなかで、子どもたちはさまよっているのではないかという気がしている。

次に、昨年担任した1年生についてである。教室では、3人の子どもがパニックを起こすという状況が続いた。これはもう、私一人では対処不可能な状況である。子どもは39人いたが、一人がパニックを起こしてカーっとなっていてところに、もう一人の子がノートを破く、別の子は机を足で蹴る、ひっくりがえる、ワーと泣くという状況である。そういうなかで、子どもと一緒にやって

きたのであるが、今はそういうパニックを起こしていた子どもたちが、学芸会では主役をやり、授業では中心的な役割を担って、成長してきている。そういう意味で、パニックを起こしてる子どもたち、「荒れ」ている子どもたちをどう見るかということが重要だ。そういう子たちの可能性に注目したい。

現代の子どもたちには、批判的な精神が育ってきている。ストレスや不安が感性と知性をとぎすます面があるように感じられる。対立や討論があったり、それから「これからどうなるんだろうな」というような、推理だとか想像をかきたてるような授業のときには、子どもたちは意欲的に参加してくる。集中できなかつたり、パニックを起こしていた子たちが、45分を越えて、集中することも珍しくない。あるとき、私は教室に箱を持っていった。それはクスリの空き箱だった。持って行って、「このなかには、あるものが入ってるんだけど、何が入ってる？」などと聞くと、子どもからはいろんな反応が返ってくる。「先生、それ、消しゴムじゃない？」「クリップ」「クスリ」「お金」。「それじゃこれを開けないで、この中身を知る方法ないだろうか」というと、子どもは、「持ってみるとわかる」「上からぎゅっと押ししてみると、まああるっぽいものなのか四角いものなのかがわかるんじゃないか」と発想する。一人の子は、「先生、それをふってみるとね、音でわかる」という。そこで、実際にやってみようということで、いろんな方法をやってみた。振ったときにチャリンという音がした。すると子どもたちから、「先生、それは絶対お金だ」という声。それに対して反論がでる。「お金かもしれないけども、お金じゃなくてもそういう音はする」と言う子どもがでてくる。金属同士だったら、そういう音がするんじゃないかという議論になる。「それじゃあ、先生が今これから箱の中のものを出してみるからね」と言って、箱のふたを開けだす。すぐパッと出さないで、少しずつ傾けていく。子どもたちはなにが出てくるのだろうと一生懸命見ている。私が「みんな、出てこいと言わないから、出てこないよ」というと、「出てこい」などと叫ぶ。さらに箱を傾けていくと、ぽろんと10円玉が出てきた。そうすると、子どもたちは「お金だ」ということになる。私が、箱に入れておいたいろんなお金を出す。「実はこのお金は昔はこういうものを使っていなかったんです。あるものをお金に使っていたんです。何だろう」とたずねると、子どもは、「紙だ」とか、「紙なんてあんまりなかったんじゃない」といった反論が出てきたりしながら、さまざまな意見を出てくる。子どもたちは、「木じゃないか」、「石じゃないか」と言いながら、そしてそのうち「先生、私は貝だと思います」と

いう子どもが出てきた。そこで、私が「どうしてあなた貝だと思うの」と言ったら、「何か貝だときれいだし、何か大事にしたいくなる」とその子どもが言った。「実はこれなんだ」と言って、黒板に答えを書いていく。ここでも子どもたちは何だろうと思ひながら、じーっと黒板に集中している。そして、子どもはその答えが貝だということを知る。昔貨幣に使われていた「キイロタカラガイ」から貝という漢字の成り立ち、読み方などを学習していった。子どもたちは文字通り45分間集中して学習した。

高校生が授業参観に来たことがあった。先ほどふれた「荒れ」た6年を担任していたときのことだ。ひとりの子が家へ帰って、夕食の時に「今日は算数のここが良かった」とか、「高田敏子の詩のここがおもしろかった」とか、「社会科の歴史の授業が楽しかった」とか、しょっちゅう語っていたため、その子の高校生のお姉さんが授業を観たくなった。そこで授業参観にこられたのだった。そのときは国語の学習だった。ある子どもが教科書の教材を読んでいたのであるが、その時にその子どもは「破れる」という漢字を「壊れる」というふうにした。そこで、私は「あなたってかしこい子ねえ、文章の前後から、だいたいこの字はどういう字なのかって考えたあたりがすごい。瞬間的にパッと考えたところが賢いね」とその子どもをものすごくほめた。「これは実際は破れると読むんだけどね」と言いながら、すかさず黒板に「破壊」と書いた。「なんか壊すとき、破壊って言うじゃない。壊すっ

ていうことは破れたりぐしゃぐしゃになることじゃない」と、そんな話をしながら授業を終えた。すると後日、その高校生が、「私もそういう授業受けたら、何でも言えるような人間に育っていったんじゃないか。私は今でも当てられそうになったら顔が真っ赤になってしまう。先生の間違いに対する考え方、対応のしかたに感動した」という意味の手紙をくださった。

そうした実践を通して、私は今、子どもの学びを変える上で、教材とともに「教室における自由」の問題が、重要なのではないかと考えている。この「人間的な自由な雰囲気」をどう拡大していくかということが必要であると思っている。授業がおもしろく、楽しいものであるなら、子どもたちは「どうしてだろう」というふうに興味をもち集中して取り組む。その内的な緊張をどういうふうに高め育てていくかということが、教育で大事なことである。

現在の子どもの姿を見ていると、「学び一般からの逃走」ではないように感じられる。機械的な練習だとか、意味がわからないことからの「逃走」「逃避」である。意味や物事のルーツがわかったり、物事の関連がわかる、自然や社会と人間との関係が見えてくる、そういう授業のときには、ものすごく子どもたちは意欲的になり集中する。そういう意味ではやはり、「学び一般からの逃避」ではなく、「『勉強』からの逃避」なのではないかと私は思っている。